

法華經下

唯一眞実の教法 法華經本門と三益

法華經の特長②

本門の特長

く おんじつじょう かいごんけんのん
久遠実成（開近顕遠）

釈尊は爾前に ぜんぎょう經や法華經迹門において、今から三千年前にインドで誕生し、十九歳で出家、三十歳で初めて成仏したという「始成しじょうしやうがく正覺と」の立場で法を説かれましたが、法華經本門においては『壽量品第十六』に、

「我このかた実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」（法華經 四二九ぶ）と説かれているように、久遠く おん五百塵点劫じんてんごうという昔に既に成道していたとする釈尊の本地ほんち（仏の眞実の境地）を明かされました。これを「久遠実成」と言い、久遠実成が明かされる法門を「開近顕遠かいごんけんのん こん おん あら」（近を開いて遠を顕わす）と言います。

釈尊は、久遠実成の具体的な内容を『壽量品』において、本因ほんにんみょう妙・本果ほんが妙・本国土ほんこくど妙の三妙をもって明かされました。

まず、久遠実成の本果について、

「我成仏して已来、甚はなはだ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず」（同 四三三ぶ）

と、釈尊が仏果を成じたのは久遠の昔であると明かされ、さらにその仏の寿命は不滅常住であると示されています。

そして成道の本因について、

「我本菩薩もとぼさつの道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず。復上またかみ すうの数に倍せり」（同 四三三ぶ）

と、久遠の過去における菩薩道の実践にあったことを明かされます。さらに、

「我常に此の娑婆世界しゃば あに在って、説法きやうけ教化す」（同 四三一ぶ）

と、この娑婆世界こそが常住の仏である釈尊の本国土であり、常にこの娑婆世界であって衆生を教化してきたことを説かれています。すなわち、一切の仏は久遠以来常住の本仏に統一されると共に、一切の国土も本地本仏の住まわれる娑婆世界として説かれました。そして、九界の一切衆生も、本有常住ほんぬの仏と同体の存在であることが説き明かされたのです。これによって事実の上に一念三千の法門が成立し、衆生の成仏が現実のものとなったのです。

法華經の特長③

法華經の付嘱

別付嘱と総付嘱

釈尊は、自身の滅後における妙法弘通のため、法華經において二つの付嘱を明らかにされました。

付嘱とは相承・相伝と同義で、仏（師匠）が弟子に法を授けて、その法の伝持と弘宣を託すことです。

法華經の付嘱は、『如来神力品第二十一』の別付嘱と『嘱累品第二十二』の総付嘱で、その起こりは『宝塔品第十一』から始まります。釈尊が『宝塔品』で仏滅後の弘經を勧められたことに対し、『勸持品第十三』では、二乗は娑婆世界以外の国土での弘經を誓願し、迹化の菩薩は此土の弘經を誓願します。また『涌出品第十五』では、他方の国土の菩薩も弘經を誓願しました。しかし、釈尊はそれらを退け、上行等の本化地涌の菩薩を召し出しました。そして、『如来寿量品第十六』で久遠の本地を明かされた後、『如来神力品第二十一』において、

「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」（同 五一三）と、法華經の肝要である妙法蓮華經の大法を「四句の要法」に括って、上行等の地涌の菩薩に付嘱されたのです。この付嘱を「結要付嘱」と言い、本化地涌の菩薩だけに限ってなされたので「別付嘱」と言います。

次いで釈尊は、本化・迹化の無量の菩薩に、法華經乃至一切の經々を分に応じて弘通するよう総じて付嘱されました。これを「総付嘱」と言います。

つまり釈尊は、迹化の諸菩薩には正・像二千年における法華經弘通を付嘱したのみで、滅後末法の弘通は許されなかったのです。したがって、末法においては、「別付嘱」を受けた上行菩薩が出現して法華經の要法たる南無妙法蓮華經の五字七字を弘通されるのです。

熟脱と下種

釈尊の説かれた法華經は、仏法の種熟脱の三益に約せば、迹門は熟益、本門は脱益の法華經です。大聖人が『秋元御書』に、

「種・熟・脱の法門、法華經の肝心なり。三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」（御書 一四四七）

と仰せられ、また『上野殿御返事』に、

「今、末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし。但南無妙法蓮華經なるべし」（同 一二一九）

と仰せのように、末法の衆生の成仏のためには、本因下種の法華經、すなわち寿量文底の南無妙法蓮華經を受持信行し、弘めていくことが肝要です。

法華經の構成

一部八卷二十八品。『無量義經』一卷、『觀普賢菩薩行法經』一卷を加えて法華三部經または法華經十卷。

『序品第一』から『安樂行品第十四』を迹門と言う。

『從地涌出品第十五』から『普賢菩薩觀發品第二十八』を本門と言う。

法華經の特長

①迹門……爾前經では成仏できないとされてきた声聞・縁覺の二乗に対し、成仏の記別が与えられた（二乗作仏）。二乗作仏を中心として一切の九界の衆生が成仏できることが明かされ、理論の上に一念三千の法門が確立された。

②本門……積尊が久遠五百塵点劫に既に成道していたという本地を明かされる（久遠実成）。事実の上に一念三千の法門が明かされ、衆生の成仏が現実のものとなった。

種熟脱の三益

衆生を得脱させるための化導の始終（順序）として、下種益・熟益・脱益が示されている。爾前権經には説かれない法華經のみの重要な法門。

下種益は、仏が衆生の心田に仏種を下すこと。熟益は、仏種を成長させて機根を調熟させること。脱益は、仏種が実を結び衆生が得脱して仏の境界に至ること。

法華經の付嘱

・別付嘱 『神力品第二十一』

法華經の肝要を「四句の要法」に括り地涌の菩薩に付嘱された。この付嘱を「結要付嘱」と言い、本化地涌の菩薩だけに特別になされた。

・総付嘱 『嘱累品第二十二』

本化・迹化の無量の菩薩に総じて付嘱された。ただし積尊は、迹化の諸菩薩には正・像二千年の法華經弘通を付嘱されたのみで、滅後末法の弘通は許されなかった。

